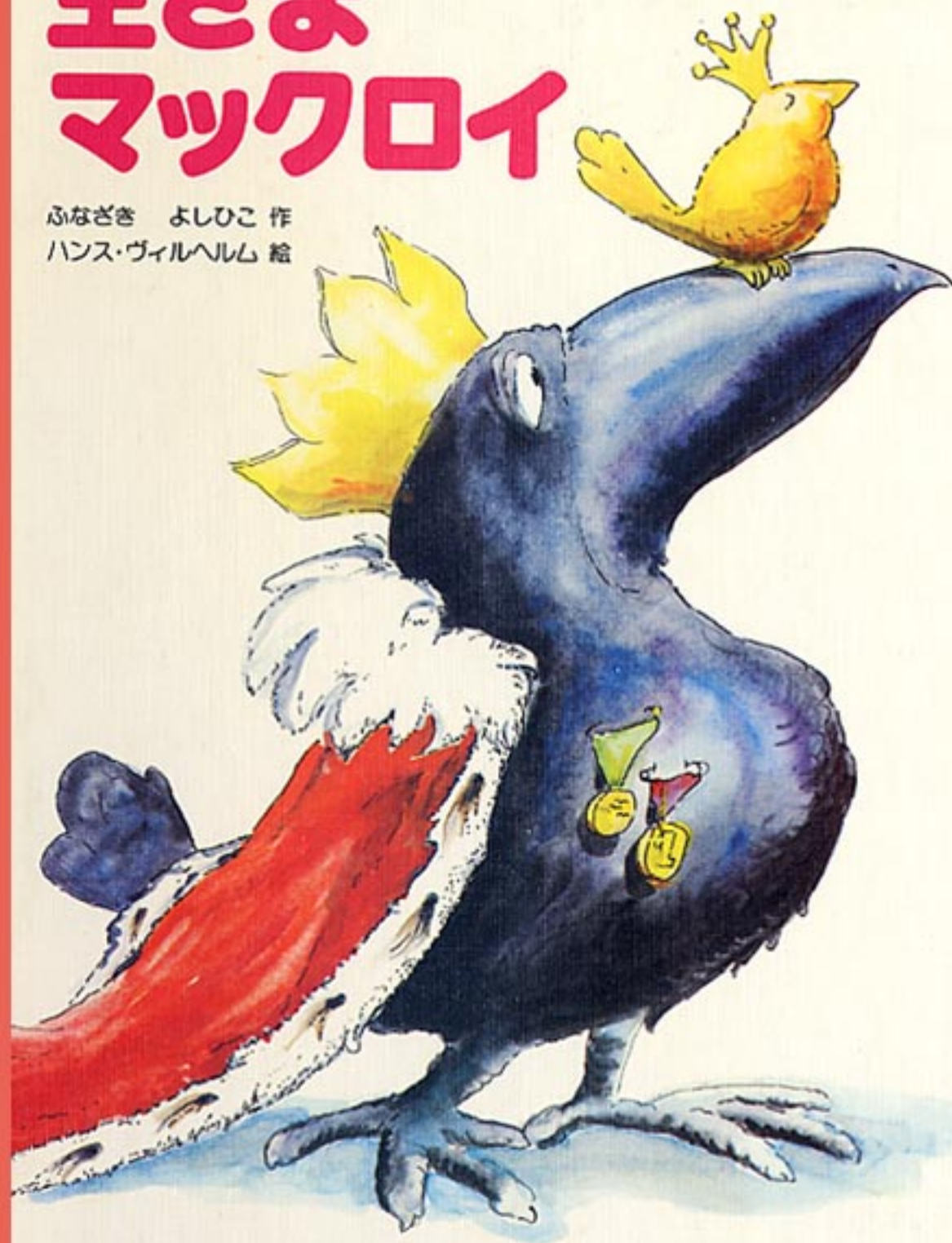


王さま マックロイ

ふなざき よしひこ 作
ハンス・ヴィルヘルム 絵



First published by
Yugakusha
Tokyo, Japan

written by Yoshihiko Funazaki
copyright: Yoshihiko Funazaki
used by permission

illustrated by Hans Wilhelm
copyright: Hans Wilhelm

all rights reserved

王さまマックロイ



ふなざき よしひこ 文
ハンス・ヴィルヘルム 絵

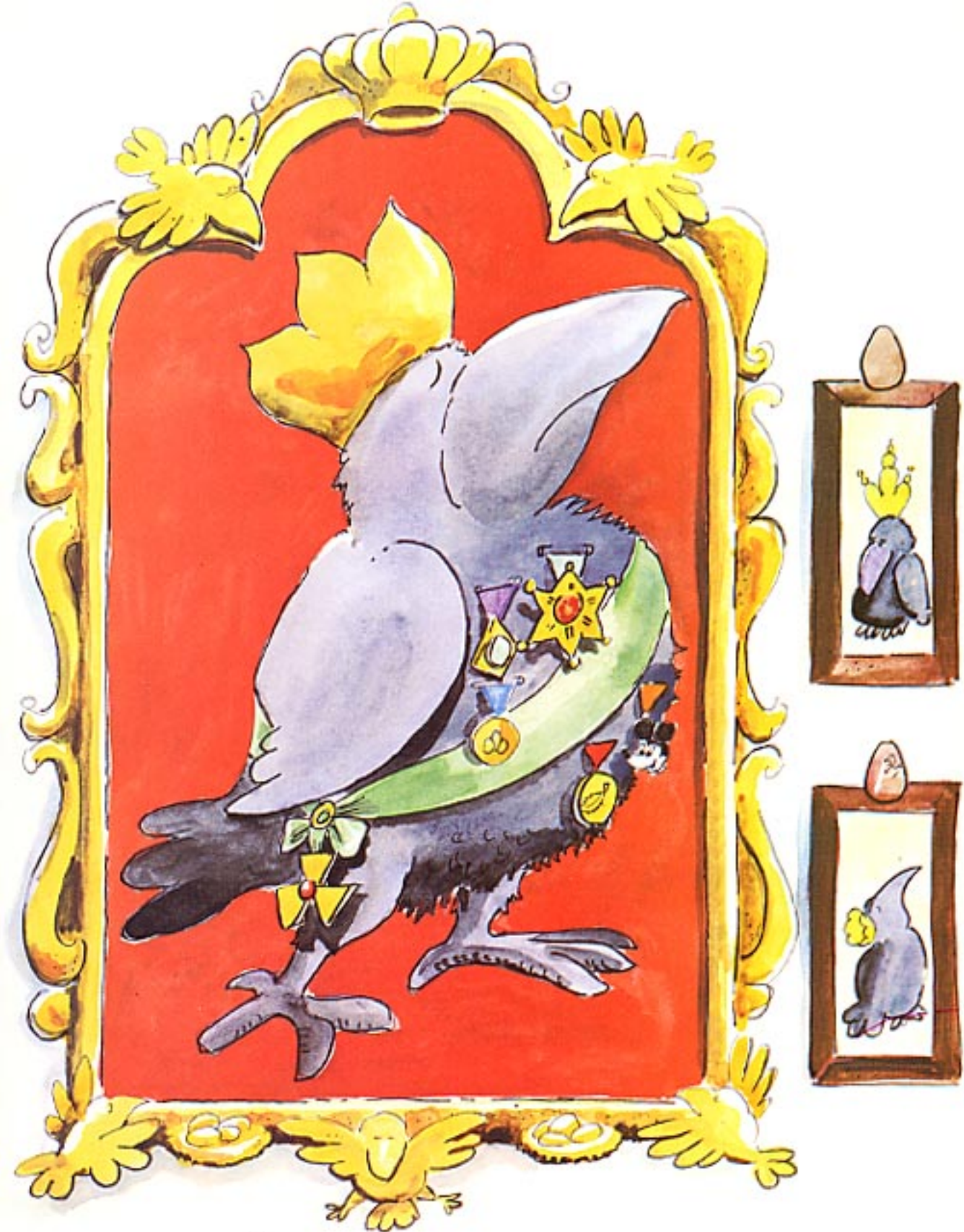
佑学社

■作者紹介 舟崎克彦(ふなざき よしひこ)

1945年2月2日、東京に生まれる。学習院の初等部から大学まで学び、経済学部を卒業後数年のサラリーマン生活を送る。詩作、レコードの作词、放送シナリオの執筆等を経て、子どもの本の世界に入る。主にファンタジイの傾向の作品をものし、小説、エッセイ、翻訳、戯曲にも手を染めている。著作は翻訳作品も含めて約100冊。自作の半数近くには自ら絵をつけている。また奥様の靖子さんとの共著も多い。赤い鳥文学賞、サンケイ児童出版文化賞、ボロニア国際児童図書展グラフィック賞推奨、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞。

■画家紹介 ハンス・ヴィルヘルム

1945年、西ドイツのブレーメン生まれ。学校で商業と美術を学んだ後アフリカに渡り、今日までのほとんどの時期を過す。そこで彼は高名の絵本作家で演出家のヘルメ・ハイネと知りあい、絵やデザインの仕事をしながら俳優として舞台にも立っていたという。その後ハンスはロンドンとニューヨークを本拠地に、雑誌のさし絵画家としてまた寄稿家としてデビュー、独自のユーモアの世界が評判を呼んで国際的に活躍するようになった。主要作品に『中国の星占い』があり、米英独三か国で出版されている。現在はコネチカット州に居住。



これが王さまマックロイ。
なにしろ わがまな王さまです。



たとえばマックロイは、まいあさ テラスへでて、
くにじゅうのものに ひとこえ、
「グワァ」と、よびかけます。



— そんなとき、王さまは みんなが ..
「ブラボー」
「ブラボー」
「王さまは なんてうつくしいこえなんだ」
と、いわなければ きにいきりません。

また、マックロイは、あたらしいふくを こしらえるたびに、
しろのまわりを ねりあるきます。



こんなとき 王さまは、くにのものが
「ブラボー」
「ブラボー」
「なんてうつくしい ふくなんだろう」
「でも そのふくよりも、王さまの はねのいろのほうが ずっとみごとだ」
と、いわなくては きげんがわるいのです。





そんなある日、マックロイは カナリヤのくにから
おひめさまを さらってきました。

「ブラボー」

「ブラボー」

くにかのものは こえをあげました。

「王さまのいきおいは、なんて大したものなんだろう」

マックロイは、それをきいて

ますます むねをはりました。

けれど、みんなは 家にかえって とびらをしめると、

「やれやれ」と、ためいきをついたものです。



ところが その日から、このくにで たったひとり、
王さまのごきげんをとろうとしないものが あられました。
それは ほかならない、カナリヤのくにのおひめさまです。

おまけに このおひめさまときたら、マックロイのことを
しばしば「からすのおじさん」などと よぶものですから、
王さまは はらがたつてなりません。



そこである日、マックロイは こっそり けらいを
よびあつめると、こう もうしつけました。

「よいか。こんや ひめがねむるころ、おまえたちは
おばけのかっこうをして へやに とびこむんじゃ。よいな。
せいぜい ひめを おどろかせてやれ！」

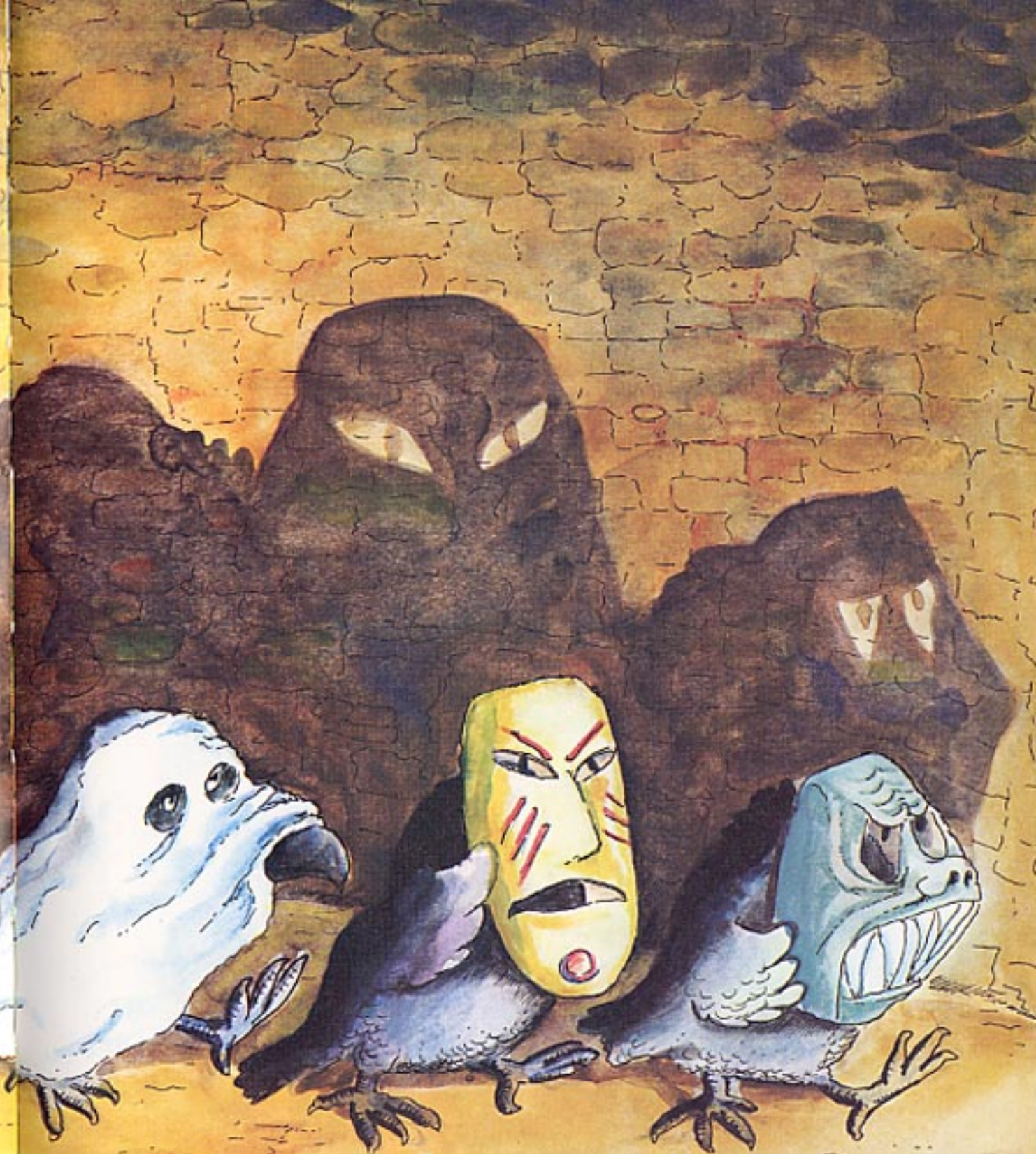


「へい」けらいは ことえて、「でも、ひめさまが
きぜつしなさったら どうしますんで……」と、たずねました。

「そのまえに わしが おばけをおいちらす！」
王さまは ことえました。

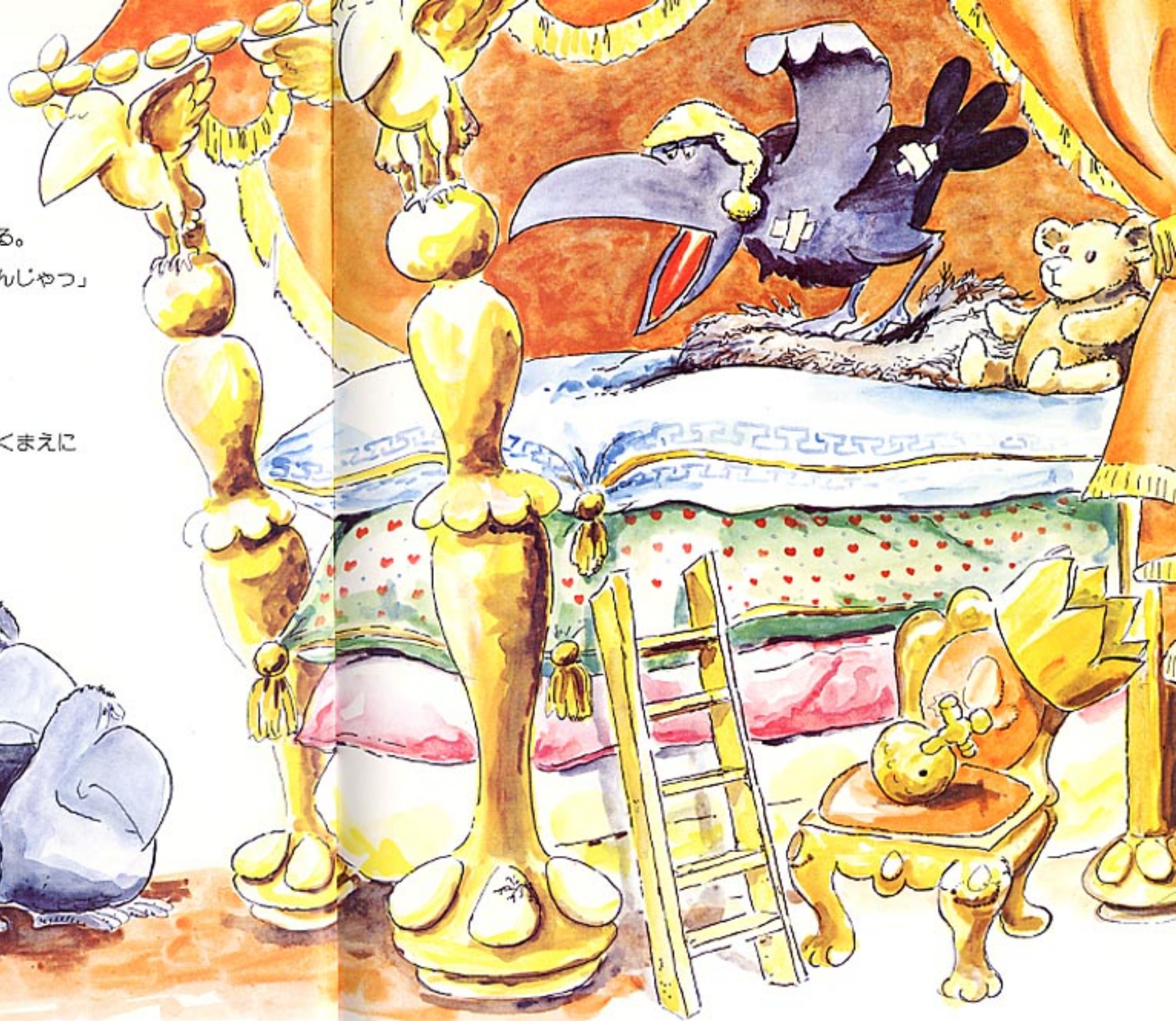


そのよる、めいれいどおり けらいたちは
ひめのへやへ ぶかいました。



王さまは、けらいたちが
へやへはいつたのを みとどけますと、

つぎのあさ、マックロイは
さっそく けらいを よびつけました。
「ゆうべのさまは どうしたことだ！
こんどこそしくじるな。
よいか、ひめはいま しろのにわを さんぼしとる。
すぐに とんびにへんそうして ひめを さらうんじゃつ」
「あの…… さらって どこへいきますんで？」
けらいのひとりが たずねました。
「よけいなことを いうでない！」
マックロイは しかりつけました。「どつかへいくまえに
わしが ひめを とりかえすんじゃつ」





王さまのごきげんをそこねて
やきとりにでもされては かないませんから、けらいたちは
いつけどおりに おひめさまを...さらいました。



王さまマックロイは そのすぐあとを おいかけます。
 「おい、とんびども！ わしは からすの王マックロイじゃ。
 ひめをかえさぬと いたいめにあうぞっ！」
 「ひゃっ ごめんなさい」
 「おかえしします」
 けらいたちは いそいでむぎをかえました。そのとたん、
 「なにをやるの。どんどんにげなさいったら！」
 おひめさまが めいれいするではありませんか。
 「とんびがからすにまけて はずかしくないの？
 そら、もつとはばたいて！」



マックロイの びっくりしたことつたら。にげられてしまつたら
 たいへんですから、あわてて どなりちらしました。
 「おい、おまえたち。やきとりだぞ！
 じぶんが からすだつてことを わすれるな！」



おひめさまは、こうして ぶじに もどりましたが、主さまは
たくらみがばれて、ますます ばかにされてしまいました。
そればかりか、おひめさまは このごろ じぶんのふるさとを
おもいだしては、ためいきをつくようになったのです。



「ああ、わたしのくには うつくしかつたわ、ホッ……
それにくらべて このくにつたら、ホッ」 こんなぐあいです。

それをきいた マックロイは
「ようし、わかった!」と、てをうちました。



主さまが かんがえたのは、ベンキヤにいつけて このくにを
 せかいいち うつくしい いろに めりかえさせることでした。
 せかいいち うつくしい いろとは、もちろん
 主さまマックロイのはねと おんなじいろにきまっています。



マックロイのつもりでは、このくにが せかいいち うつくしく
 なれば、おひめさまは ずっと ここで くらしたいと
 おもうでしょうし、そんなよいことを なしとげた主さまを
 うやまうにちがいないのです。



さあ、それからが たいへんです。…
 ベンキやたちは、かぞく、ともだち、しんせきから
 しらないひとまで かきあつめると、



くしゃみがでるのも がまんして はたらきつづけ、
 その日のよるのうちに やくそくどおりのしごとを
 やつてのけました。

こう どこもかしこも まっくろでは、
マックロイが どこにいるのか わかりません。
そのすきに カナリヤのおひめさまは じぶんのくにへ
さっさと とんでかえってしまいました。



つぎのあさ、めをさました おひめさまの おどろいたこと。
なにしろ、みわたすかぎり まっくろけです。
おひめさまは とっさに なにかいおうとしましたが、

00

これが主さまマツクロイ。

でも その白から ごらんのとおり だあれのめにも みえません。